

人身売買 後絶たず

カンボジア、売春目的

売春をさせる目的の人身売買が、東南アジアではびっぴっている。貧困家庭から女性を連

れ出し性産業で強制的に働かせるのが主な手口。被害に遭った人たちの心の傷は深い。被害者救済や、防止の取り組みの現状をカンボジアで見た。

(フノンペンで斎藤正明、写真も)

被害者救済へNGO活動

職業訓練「牛銀行」／運転手も協力

「ここに来て、やっとIP(アフエシップ)と助かりました」
と助けを求めた。首都フノンペン郊外に設けている人身売買被害者の保護・教育施設で、5月から生活し(NGO)「AFESIP」

同国東部の貧しい農村で暮らしていた今春、知人が「マレーシアで仕事に就ける」と分かったけど、見張ら母親に言っって金を渡されて、だれにも連絡でし、連れ出した。し



施設で生活するのは16〜25歳の女性60人。NGOの担当者たちが独自に性産業を調べ、警察と協力して助け出した。貧しい家庭出身で学校に通えなかった人も多く、入所者の7割はカンボジア語の読み書きが十分ではない。1年半ほど滞在し、カンボジア語や英語を学び、縫製の職業訓練を受ける。女性たちが受けた心の傷も深く、施設職員は「外部スミさん(30)は「外部の病院とも連携し、さまざまな心理療法を試みているが、回復まで時間がかかる」と話す。

人身売買は東南アジアで深刻な問題だ。とりわけ陸続きのカンボジアやベトナム、タイなどの各国間では、女性や子どもが頻繁に行き来させられ、実態がつかみにくい。重労働など売春強要以外の目的も含め、被害者は地域全体で10万人に上るといわれる。主立った産業がないカンボジアでは、貧しい農村からの人身売買のケースが後を絶たない。状況改善のため、NGO「国際子ども権利センター」(本部・東京)は同国南東部のスライエン州の役場や学校で地元NGOと協力し、「出稼ぎと称する人身売買の手口」などについて周知活動中だ。農村で貴重な家畜である牛を農家に貸し出し、生まれた子牛を贈る「牛銀行」も約70



世帯を対象に実施。いずれも、人身売買を生み出す無知や貧困をなくそうという試みだ。同センターのフノンペン事務所の前井博司さん(30)は「カンボジアの性産業で働く女性の3分の1は18歳未満とされる。根本原因を解消する努力を続けた」と語る。

フノンペンには「マッサージ」「カラオケ」などの看板を掲げた店で、売買取が行われているケースが多い。店には、日本人を含む外国人も多く出入りしているという。トゥクトゥク(座席車両付きバイク)の運転手やホテル従業員に対し、これらの店へ客を案内させない呼びかけも、地元NGOによって進められている。

協力する運転手たちが着るのは「チャイルド・セーフ」と書かれたTシャツ。これを着た男性は「売買取の協力はしない。客に頼まれたら本場のマッサージ店に連れて行く」と話した。